

デンマーク視察報告書

場所：福祉機器センター（公営） 13:00～15:00



■概要

デンマーク随一の福祉機器センターで全国から要望を受け付ける機能をもっている。現在改装しているが見学をさせてもらったのは幸運であった。福祉機器とは言っても高齢者や障害者だけではなく0歳児から必要な人に無料で機器を処遇される。また、在宅生活で不便な点が出てきた場合の改修も対象となる。その人に何を補えば日常を送れるのかを専門家が検証し、提案してくれるという何とも頼もしい仕組みである。

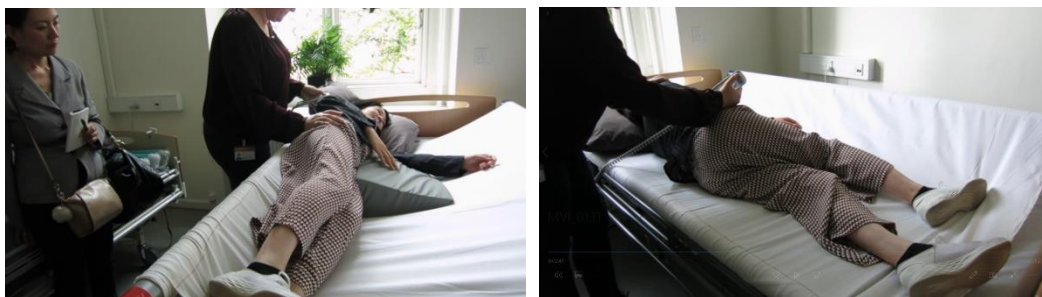


■展示機器

整備している機器の種類、メーカー数、取り扱い国数などは不明で聞くことは出来なかったが、常に展示会などで探したり、コンサルタントからの提案を受けて最新の機器をリサーチしているそうだ。見学できた機器はエアマット、ベット、転倒時の起立補助機器、ユニバーサル食器、ダイルーム用椅子、メンタルコミットロボット、歩行器など。特に印象に残ったのは、ベット上に設置してシーツを巻き上げて体位交換をするというもの。いかに介護する側に負担をかけないようにするかというデンマークらしい補助具である。



○シーツを巻き上げて体位交換 介護する側にも優しい



■総評

必要な人に必要なモノを無料で専門家が検証し提案してくれるというシステムは、ノーマライゼーションそのものである。どのような状況になっても「日常」を諦めず、それに必要なモノ、ヒト、サービスを自治体が責任をもってサポートしてくれるという環境は一人一人の個人へのエールになるだろう。また、デンマークではどこにいてもベットや椅子と同等レベルで天井走行リフトが標準装備されている。介護される側の意思を尊重するには護する側の絶対的な労働安全を護するという概念が現場で標準化されているのだ。

それと比較して日本はどうだろうか。人の身体を人の力で何度も移乗を繰り返している現実。被介護者の意思を尊重する以前に心身を疲弊させるような環境を放置していないか。今までというやり方に固執し概念を変える努力を怠っていないだろうか。まずは介護する側を護らねば介護される側への持続的な現場は実現できない。

モノはヒトをサポートする。ヒトは助けが必要なヒトをサポートする。その好循環の仕組みを、日本のどの施設に行っても実現できている状態に全速力で移行すべきである。ちなみに、当施設では二人移乗ゼロを実現したのは床走行リフト 6 台、リショープラス 4 台の活用というモノの活用があっこそだ。更に 11 月には天井走行リフトを 12 名分設置する予定がある。今後も、最新技術と人を掛け合わせて“日本のニューモデル”を創っていきたい。

以上